

## 入山 まかりならぬ

小道 周帆

鎌倉東慶寺は紫陽花の季節を迎えていた。山門、参道、本堂そして松岡宝蔵の傍に謙虚ながらも静かに咲いている。そんな中で本堂から墓地までに至る岩肌には、花茎を伸ばした先に小さな星型のイワタバコの花も一面に咲き出した。

天秀尼は毎日の読経を終えた後に、魅かれるようにこの花を見つめていた。湿り気のある岸壁に必死で生き、可憐な小さな花を咲かせている様子に、陰湿な世から助けを求め必死に手を伸ばし、この東慶寺で再び花を咲かせたいと縋っている女人のように思えた。

「天秀尼さま！女人と幼子が山門に辿り着いております」

「お願いでございます。どうかお助け下さい」

婦人の身なりから位ある武士の妻女のようにであった。追手から逃れてきたようで、恐怖で身を震わしながら地面に顔を伏し、

「お助け下さい」

「お助けを！」

何度も繰り返していた。

まずは部屋に上げ、お茶を点て、静かな中で落ち着かせた。

「私は会津藩の家老をしておりました堀主水の妻奈江と申します。藩主加藤明成様との諍いにより一族は追われる身となりました。主人から『お前と娘千絵には申し訳ない事態となりました。我らと一緒に逃げ遂せないし、足手まといでもある。そこで、鎌倉には女人を救ってくださる有難いお寺があると聞いている。そこにお縋りして命を永らえて欲しい』と、藤沢宿で泣く泣く別れ、東慶寺様を必死に探し出し、やっとの思いで駆け込んでまいりました。どうか私はともかく、幼い娘千絵だけでもお救い頂きとうございます」

天秀尼は、母親の横で事情が判らないまま目に涙をためている七歳くらいの子に、優しい眼差しを向けた。少し安心した表情になったのを見て、ふと、自身の七歳の頃の出来事や周りの状況が思い出された。

\*

\*

\*

慶長十九年（1614）の冬、乳母の多麻から、

「お姫様に相応しい服装をお召し頂かなければ」

と言われ、今まで着たこともない煌びやかな着物姿になった。

「こんな着物は初めて、うあ嬉しい。どこかへ出かけるのですね」

「エエ、これから奈阿様の父上にお会い頂きます」

生まれ育った泉州岸和田から駕籠に揺られて、何も判らずに案内されたのは大きなお城の立派なお部屋であつた。

「静かにするのよ。お父上のお出ましです」

「恐れながら、こちらにおあします姫君は、秀吉様の従弟となる小出吉政のご長男岸和田城主小出吉英様の家臣にお育て頂いておりました奈阿姫でございます。七歳になっておられます」

「オオ、そなたが奈阿か。立派に育つたな。なかなか可愛いのう。ウン、さすがは淀様の血が流れておりますな。これやあ美人になること請け合いですぞ」  
「どれどれ、ほお確かに私の幼き頃に似ているようすな。ほんとに会えて幸せだわ」

「先般の徳川との和議内容には不満もあるも、こうして我が娘、それに先日は息子にも会え、豊臣の血が繋がったのは何よりだ。何時かは、きつと……」  
「これも妹の常高院が徳川との交渉に骨を折ってくれたお陰だわ。私もこうしてお前の子に会えるなんて……。すっかりお祖母ちゃん気分になってしまいましたわ」

厳しい状況に置かれた城内で、秀頼と淀君に暫しの笑顔が戻っていた。奈阿はそんな会話を何も解らないまま聞いていた。

それは大坂冬の陣和議後の慶長十九年（1614）十二月の小春日和の日であつた。奈阿は初めて父・豊臣秀頼と祖母淀殿に面会した。そして兄も同様に淀殿の妹・常高院の嫁ぎ先である若狭京極家に預けられ、乳母の兄の養子となって身を隠していたが、奈阿よりも少し前に大坂城に入城していた。

二人はそのまま大坂城にとどまり、広い部屋で無邪気に遊んでいたが、やがて人々の動きが激しくなり、怒号の聞こえる日々が続いた。

桜の花が散りだした頃に、再び父上の前に連れて行かれた。甲冑に身を包んだ父上から、

「怖い思いをさせているが、心配はいらぬ。そなたたちは豊臣家の血を継ぐ大切な子だ。大丈夫、守ってやるぞ」と言われた。

そこに普段は二の丸に居られる千姫様が現れ、思いつめた顔で秀頼に哀願した。

「われは今や豊臣の人間です。どうぞ秀頼様、淀様とご一緒させてくださいませ」

「いや、千には申し訳ないが、幼き頃から豊臣家に興入れしてもらい、その

役割は十分に果たした。千は敵將徳川秀忠の娘であり、何も我らと死を共にする必要はない。どうか生きながらえて、千の子ではないものの秀頼の子として、この子らを守ってやって欲しい」

千姫がまだ秀頼に寄り添おうとしているのを、大野治長が氣を利かせて、こう言った。

「千姫様、ここから逃れるのではなく、お父上の秀忠様そして家康様に、秀頼様と淀殿のお命をお助けいただくようお願いして頂きとうございます」

千姫はそれを聞き、幼児の時に可愛がってくれた祖父・家康にお願いしよう、侍女の松坂の局に案内されて、葵の紋の着物を披かせながら徳川本陣に入り込んだ。

そうした動きの中を乳母と共に国松、奈阿は大坂城から密かに逃れた。

豊臣秀吉の造った難攻不落といわれた大坂城の落城を前に、城と共に滅ぶ覚悟をしていた秀頼と母淀殿は、徳川軍が天守閣に攻め込む様子を見つつ、無念さを振り払うように自害し、果てた。

本陣に助命嘆願に来た千姫を家康は温かい目で迎えながらも、願い事に関しては一切受け付けず、厳しい顔となった。その際、侍女松坂の局から、秀頼の子として国松と奈阿姫がいるとの知らせが伝えられた。

「秀頼め、城外で誰にも判らぬように産ませ育てていたのか、許せん。遠くは行くまい。何としてでも、探し出せ」と厳命した。

家康の心には、徳川方といいながらも、石田三成ら文治派に反発して、徳川に取り敢えず付いた大名が多くいると判っていた。彼らの本当の心の支えは家康よりも秀吉にあるとの疑心が拭い切れなかった。それだけにいつ何時、秀頼の子を担ぎ出して、徳川に反抗しないとも限らない。今こそ秀吉の血を何としてでも絶たねばならぬと考えていた。

七歳の奈阿姫は乳母の多麻と、ごく普通の親子に模して逃れていた。出身地である岸和田城下は、大坂城に近い重要拠点となることから、徳川からの強い働きかけにより城主小出吉英は今や徳川方になっていた。奈阿姫を城主に差し出せば報奨も期待できるが、多麻にとつての奈阿姫は生まれた直後から乳飲み子として育てており、我が娘同然であり、断じて男どものように打算で動くことはできなかった。

多麻は岸和田には詳しくとも大坂、京都についての地に明るくなく、また逃げる術も承知している訳でもなかった。取り敢えずは常高院さまと関係の深い臨濟宗妙心寺内の塔頭を訪ねた。

「お願いでございます。女、子どもを追手から匿ってくださいませ。とりわけ、この子の命を御仏様のご慈悲でお守りいただけませんか」

多麻の必死に願う様子と共に、塔頭の僧侶が冷たく言い放った言葉を七歳の奈阿は悲しい思いで聞いていた。

「豊臣と縁のある方を匿う訳には参りません。今や徳川様の時代であり、そのことは常高院様が一番感じておられることでしょう」

「何卒、この子にご慈悲を…」

「では道に迷った親子連れということで、僅かばかりの路銀を提供させていただきますでしょう。そうそう、二里ほど先に廃寺がございますので、そこで夜露を凌がれればよろしかろう」

こうして二人を体よく追っ払った上で、常高院様の嫁ぎ先であった京極家に報せた。京極家は関ヶ原の戦いの際に、東軍へ寝返り、大津城に立てこもったことで知られており、何としてでも徳川での更なる地位向上を目指していた。これ幸いと奈阿を捕え、五月十二日に徳川に差し出した。奈阿の逃避行は僅か五日で終わった。

奈阿が成長して天秀尼になってから聞いた話では、兄国松はお守り役の田中六佐衛門と乳母と共に伏見で捕らえられ、五月二十三日京都六条河原で斬首されたという。

千姫は、秀頼・淀殿の助命嘆願も叶わず、自分一人だけが逃がれたとの自責の思いから、伏見城内で打ち拉がれ涙していた。さらに秀頼の子である国松が、僅か八歳で命を絶たれたと聞き、余りにも哀れで、秀頼から子の命を守って欲しいと頼まれていたにも関わらずこれまた果たせず、わが身を厳しく責めていた。

唯一残るは奈阿の命である。この子だけは何としても守りたい、守らねばならないと強く思っていたが、不穏な動きが耳に入った。

「女といえども豊臣の血を繋げる訳にはいかぬ」

「八歳の国松を斬首したことからその残虐さに宮廷の評判も良くない上に、何かとうるさい京都民衆からの反発もあり、奈阿には同じことはできぬ」

「何らかの方法で病死扱いにしてしまおう」

そんな方策が検討されていると千姫の侍女から聞いていた。こうなれば、祖父家康様に談じ込むほかはない。

「私は奈阿と同じ七歳の時に、十一歳であった秀頼様のもとへ嫁がされました。嫁ぐとはいえ、人質として豊臣家に差し出された訳でございます。幸いに、松坂の局をはじめ多くの侍女と一緒に、母上の実姉である淀殿にも可愛がられました。その淀殿も秀頼様も、さらには国松様まで命を落とし

ております」

「千には徳川家のためとはいえ、辛い思いをさせてしまった。だからこそ、豊臣から離れた訳だ。さてと、今日参ったのは何かな」

「奈阿姫はたった一人きりで二条城で留め置かれています。このままでは心を病んでしまいそうです。そこでお願いががございます」

「何かな」

「奈阿様を私の養女にしようございます。何としてもお聞き願いたく存じます」

家康は孫の千姫には負い目があった。人質として豊臣秀頼に嫁がしただけでなく、千姫の侍女や守り役として遣わした中に間者を紛れ込ませ、豊臣家の様子と、大坂城内の動向を探らせてきた。千姫を利用してきたものの、千姫からの秀頼、淀殿の助命嘆願は一切聞き入れなかった。さらには助命を願っていた幼い国松の命も奪った。それだけに千姫の願いは単なる奈阿の命乞いにとどまらず、より確実に命が守れる養女にして欲しいと言い張るには、余程の覚悟をしているのだろうと察した。それだけに、家康としても辛い、豊臣の血は、女といえども絶っておかねばならぬと考えていた。

そこで思いついたことがあり、鎌倉の東慶寺に使いを出した。家康が関東入りの際に、戦国の世で荒れ果てた鎌倉の寺々に寺領を寄進したが、その中で、足利家と縁のある尼寺の長慶寺を優遇したことを思い出したのだ。

——東慶寺にお願いの儀がござる。豊臣秀頼の七歳の娘子なるが、徳川家の千姫の養女にして、その生涯を貴寺で修業をさせたいと考えておる。お引き受けいただけないか。なお、ご要望の事項があるなら何なりと申し出願いたい——

東慶寺十九世住持 法清尼からの返書。

——当山をご指名頂け、身に余る光栄に存じます。千姫様の養女様は私の付弟子として入山頂きたく存じます。

なお、過分なるお申し事項に關しましては、当山は開山以来の寺法がございます。これを絶えることなくお守りいただきたく存じます。

開山以来の寺法とは、

一、男子禁制であること

二、女人が困っておるのを守るということ  
でございます。何卒お聞き及び願いたく存じます——

家康はこれを読んで、男子禁制だから入山させるのであり、ここだと豊臣の残党も足を踏み入れることも出来まい。尼となれば豊臣の血はこれにて絶える。また、以前より東慶寺は駆込寺、縁切寺として名を成しており、これも良かろうとした。

そこで千姫の願いに対して、こう沙汰した。

「奈阿を千の養女とすることは許す。ただ、千の子となっても千が育てることとはまかりならぬ。奈阿は格式高い鎌倉東慶寺に入れるとする」

なお、東慶寺が寺法を守りたいという願いを出した背景には、元和元年（1615）七月に『武家諸法度』『禁中並公家諸法度』と共に『諸宗諸寺法度』が発令され、従来認められていた寺の特権を幕府が制限を加えようとしていたからである。こうした中で、東慶寺は他に例を見ない『権現様御声懸り』の特権が得られた。また、奈阿姫を入山させれば、幕府との関係深い寺として將軍家の庇護が受けられる期待もあった。

こうして奈阿は伏見城で千姫と二ヶ月ほど暮らし、東慶寺入山を控えて江戸に向かうことになった。乳母多麻は奈阿の心が癒されるまで一緒に過ごしていたが、江戸行が決まった際に千姫に呼び出された。

「そなたにはいろいろとご苦労を掛けました。奈阿は何とか命を永らえることになり、江戸に行った後に鎌倉長慶寺に入山し、尼となって父上、兄上の霊を祈る毎日を送ってもらおうと思います。ついては幼児ゆえ心配もあるうが、私の侍女で心優しいアキを付けようと考えています」

「ありがとうございます。千姫様のお働きかけに感謝しております。アキ様なれば奈阿姫と親しくして頂いており、適任かと存じます。お氣遣い誠にありがとうございます」

「何もしてやれぬが、そなたはこの後、如何するのか」

「私の夫・三宅善右衛門は先の戦いで討ち死にしております。については実家が泉州で庄屋をしており、まずは実家に戻ります」

多麻が伏見城を去った後、奈阿姫の様子が変わった。今まで子供らしく遊んでいたが、黙ってしまうことが多く、時に泣き叫ぶようになった。アキが必死で庇うものの、一切を拒否し、食も細くなってしまう。このままではせっかく永らえた命を落としかねない。

千姫はそうした様子を見て、やはり奈阿には赤子の時から育てられ、厳しい状況の中で一緒に逃避してきた多麻でなければならぬと痛感した。急いで多麻を呼び戻し、江戸にも鎌倉にも侍女として同行するように頼んだ。

多麻は嬉し涙を流しながら喜んで受け入れた。

元和二年（1616）、紅く輝く紅葉が寂しく散り始める晩秋の鎌倉東慶寺に、華美を抑えた駕籠が着いた。藁葺きの山門までの傾斜の急な長い石段を、乳母多麻に手を引かれ一段一段、朽ちた落ち葉を踏みしめながら登っている奈阿姫の姿があった。七歳ながらも、自分の悲しい運命に立ち向かっているようであり、そしてまた、前右大臣豊臣秀頼息女で、將軍秀忠息女千姫養女

という畏れ多い身分に応えようとしているかのようでもあった。

奈阿姫の乳母であり侍女である多麻は、世が世なれば美しい姫君として宮中に嫁がれる身でありながら、僅か七歳で、尼寺で過ごされるかと思うと悲しみがこみ上がる。その気持ちを振り払い奈阿姫の身の回りに、母親代わりとなって一生を捧げようと覚悟していた。

出迎えた十九世住持 法清尼様は、

「お待ちいたしておりました。この静かなお寺で、まずは心清らかになっていただき、作法、書、歌道、茶道、華道を身に付けて頂ければ結構でございます。まだ幼うございますから決して落飾を急ぐことはありません」と、肅然たるお声で話された。

多麻はありがたいお話に安堵した。入山し、すぐさま髪を剃り尼になるものと思っていたが、幅広い学びの機会が与えられたことに感謝した。恐らく千姫様からのご配慮が効いているのだろう。併せて寄進も相当なものであったようで、庵を与えられ何不自由なく過せた。まさしく千姫の娘御としての扱いであった。

こうして奈阿姫は姫としての教養と、一人前の尼僧を目指して法清尼に仕え禅を学んだ。一般の常識、家事事項は多麻が担当した。また、寺領内にある支院にも出かけ、東慶寺に駆け込んだできた悲しい境遇にいた女人の世話を、多麻の指導の下で行っていた。

時には鎌倉の街を散歩もした。それには鎌倉を統治する玉縄藩主である家康直臣の本多正信の了解と、身辺警護が条件とされていた。とはいえ東慶寺を含む鎌倉尼五山である太平寺・国恩寺・護法寺・禅明寺には、同じ臨済宗の尼寺であることからよく出掛けた。

東慶寺に入山して間もなく十年を迎えようとしていた奈阿姫十七歳の春、寒さにめげず爽やかな香りを放ちながら、気品高く咲く梅の花に囲まれて髪を下した。天秀尼の誕生である。

その後も修業に励み、着々と尼僧として心の悠揚さと気構え、さらには立ち振る舞いが昇華していった。

東慶寺の学びで、寺法である女人を救う考えについて法清尼様はこう説かれた。

「人は生まれたからには、生涯を全うするのが仏の教えるところである。女人が死を考えるときは、追い詰められ、苦痛から逃れようとしているからであらう。東慶寺の使命は、追い詰められた状況から分離し、心静かに過ごす場を与え、再び生きようとする力を培う一步にしてみたい」

「法清尼様、しかれども女人は力弱き者ゆえ、男の身勝手に蹂躪されてしまうのではありませんまいか」

「知っての通り、当山は第一に男子禁制を寺法としており、何人も男たるも

のは入山できぬ。さらに力弱き女人でもできることがある」

「何事でございましょうか」

「それは、力で負けても心で負けぬということじゃ。決して屈しなければ負けはせぬもの。その心を学ぶのじゃ」

「解りました。強い心を学ぶよう修業いたします」

奈阿姫が天秀尼として成長している様子を知った千姫は喜びながらも、自身は再婚相手の姫路城主本多忠刻を亡くし、辛い思いの中にいた。出家後の天秀尼に刺激され、自らも落飾し天樹院となった。その際に東慶寺に仏殿を寄進した。その他、千姫の弟徳川忠長死去後、その屋敷が解体され、東慶寺の客殿と方丈として再建すべく、寄進された。これらにより東慶寺の景観が一変し、名実とも最高位の尼寺となった。

このように豊臣の遺児でありながらも天秀尼と徳川家とは強い絆で結ばれ、その千姫と奈阿姫の心を繋ぐ働きを陰で支えていたのが侍女の多麻であった。千姫が勝姫を生んだ時には、お祝いの歌を添えた贈り物を勧め、また次女の幸千代が病により亡くなったときには悲しみを癒すべく、心鎮まる仏話を伝えるよう手配した。いずれも天秀院の名であるが、すべては多麻の采配の下で行われていた。

師の十九世住持法清尼は、次の東慶寺の住持には天秀尼にするとして修業をさせてきた。その機が熟したとして、嘉永十六年（1639）天秀尼三十歳の時に東慶寺第二十世住持に指名した。

\*

\*

\*

天秀尼が第二十世住持になって一年を過ぎようとしたとき、会津藩家老の妻子が駆け込んできた。その際に、母の傍で不安げな娘を見て、天秀院は大坂城から逃れて、妙心寺の塔頭に救いを求めた自分を見ているようであった。あの時の僧侶の冷たい言葉と、その後の自己保身の対応には悔しさと怒りが生じて来るのだった。

理由、事情は何であれ、命乞いをしている女人を生き永がらせるのは東慶寺の務めである。不当な男たちの仕打ちから逃れ、駆け込んできた女人が心安らかに過ごすために、寺院内には陰涼軒、清松軒、永福軒、妙喜庵、海珠庵という五つの支院が用意されており、天秀尼は躊躇することなく堀奈江と千絵を預かった。

二年後の寛永十八年（1641）、所管の玉縄藩からの知らせがあった。それは預かっておる妻子の夫である堀主水と弟二人が高野山に逃れていたものの、会津藩主加藤明成の度重なる要請に断り切れず、高野山は三人の身柄を



幕府に預けた。幕府は両者の言い分を聞いた上で、いかに悪政を部下に強いていようと主君への反逆は許されないとし、会津藩江戸屋敷に三人を引き渡した。藩では反逆者として厳しい処刑をしたという。東慶寺にも影響がなければいいが…と伝えてきた。

これを聞き、天秀尼は「諸宗諸寺法度」により、天台宗の本山である比叡山や真言宗の本山の高野山といえども、従来は幕府の支配の及ばぬ所とされていた寺院であつても抗し切れない現実を知った。

奈江は夫の死を知り、悲しみと共に武士の妻たるものは夫の後を追ひ、死するのが道だと考えていた。それを察した侍女多麻は、

「私とて、夫を大坂の陣で亡くしましたが、今もこうして生きております。夫の菩提に祈りを捧げると共に、新たに天秀尼様に役立つことに生きる因を見つけたのです。奈江様にはお子様の千絵様がおられるではありませんか」と話した。

天秀尼は、

「この寺に預かってもらえと指示されたのはご主人の堀主水様でしょう。自分の命に代えてでも生き抜いて欲しいと望まれたのですよ。それに応えて奈江さんも追手から逃れたいとの思いで駆け込んできたのでしょう。あの時の思いに立ち返ってください。私は先代の法清尼様から、生涯を全うするのが仏の教えだと学びました。どうぞ、ご主人を弔つて生き続けてください」と諭された。

翌日からの奈江は実家黒川家の守護神である熊野権現を礼拝する毎日を送っていた。

何やら寺の周りが騒がしくなり、何事かと事情を聴いたところ、会津藩の武士たちが堀主水の妻女も、主水と同様の罪人であり、引き渡しを求めているという。

多麻は我がことのように懇願してきた。

「会津藩主加藤明成様は奈江様と千絵様を捕えて、死罪にする考えだと思われます。思えば、奈阿姫様と共に私も捕えられ、死を覚悟しておりましたが、千姫様のお蔭で、こうして今日まで命を保っております。その恩に報いて頂けないでしょうか」

「安心なさい。開山以来、女人が困っておるのを守るという寺法があり、『諸宗諸寺法度』といえども、東慶寺に認められた『権現様御声懸かり』は今も生きています。会津藩の何人たりとも『入山まかりならぬ』と伝えます」

と、日ごろは温厚な天秀尼様が強く激しく語られた。それは法清尼様から学ばれた力で負けても心で負けぬ、強い心を持つというものであった。

会津藩主加藤明成は堀主水を高野山から引き出した余勢を駆り、

「たかが尼寺であろう。何するものぞ。今に詫びて妻女を出してこよう」  
との考えを部下に伝え、引き続き武力によって東慶寺を取り囲むと共に刺客までも送り込んでいた。

初夏を迎え、日ごろは清閑な北鎌倉の祈りの地に、静かに咲く花々は物騒な動きに抗するかのように花を咲かせていた。白いホタルブクロの花は恥を知れと言わんばかりに下向きに咲き、花菖蒲は何事かと周りを見ようと首を伸ばして咲き始めた。

そんな風情も感ぜず、藩主加藤明成は何としても堀一族を捕えたいと執拗に幕府に働きかけ、遂には

「例え会津四十万石の領地を返上しても構わない故、東慶寺に攻め入りたい」と願っていた。

それを聞き及んだ天秀尼は毅然とした態度で、

「古来よりこの寺に来る者、いかなる罪人をも出すことなし。しかるを理不尽の輩、無道至極せり。明成を滅却せしむるか、此の寺を退転せしむるか、二つに一つぞ」

との決意で臨まれた。

併せて、義母天樹院千姫様を通して、幕府に加藤明成の非道を訴えられた。

千姫の弟である將軍家光は、会津藩加藤家を改易するか、東慶寺を滅すかの選択を迫られた。『権現様御声懸り』の特権を無視することは出来ないだけに密かに会津藩を探索させていた。

報告によれば、主君加藤明成の政事は先代の加藤嘉明とは違い、利己的で贅沢な振る舞いが目立ち、藩財政は困窮状態にあり、それが為に農民に重い年貢を厳しく取り立て、商工業者には法外な運上金を課し、領民の評判はすこぶる悪い。

当時の徳川幕府は本多正純が老中を務め、家康亡き後も徳川家による太平の世を絶対とし、豊臣方の大名の力を削ぐ政策を採っていた。

その例としては、加藤清正の加藤家はその後継の加藤忠広の時に、肥後五十四万石から出羽荘内一万石に改易した。また、広島四十九万石であった福島正則は、その子福島忠勝の時に信濃川中島四万五千石、さらに福島正利の時には三千石と大藩を改易していた。

会津加藤家もそれらに続く四十万石の大大名であり、この際、加藤明成の一連の動きに処す機会と捉え、会津四十万石から石見山田一万石へと改易した。

東慶寺は再び花々が咲き、とりわけ玉紫陽花の丸い蕾が元氣よく弾け、紫の小さな花が可憐に咲き出す。静かな秋の尼寺に戻った。

奈江は迷惑を掛けたお詫びと感謝の気持ちと共に、天秀尼の寺を賭した毅然たる心に感動し、弟子にしていただきたいと願い出た。奈江の熊野権現への帰依する毎日の姿を見ており、『寿林』という号を与えた。

会津藩が加藤明成から保科正之に代わったことを聞き、奈江は名残り惜しみながらも東慶寺を辞して南会津の実家に千絵と共に戻ることにした。

「天秀尼様ありがとうございます。お陰様で親子ともども命を永らえしました。お礼の申し上げようもありません。この御恩に報いるために信心を怠らず、祈願を続けます」

「どうかこれからも悲しいこと、辛いことがありましようが、その時にはこの仏像におすがりして下さい。必ずや守ってくれましよう」と、天秀尼は阿弥陀如来像を奈江に贈った。

それから二年後、まだ花の少ない二月にそつと黄色い花を咲かせる蠟梅のひかえめで奥ゆかしい姿を、天秀尼は慈しみの心で病床から眺めていた。新年の諸行事に忙殺されたことから体調を崩されていた。

お世話する多麻に笑顔で話されていた。

「思えば赤子のときから今日まで、私を守ってくれた多麻は私が仕える仏様以上の有難き者です。本当にありがとうございます」

正保二年（1645）二月七日、天秀尼 享年 三十七 示寂。

同年九月十五日、侍女 多麻 没。

東慶寺の庭の、秋明菊の白い花びらが風に散った。

完

〔作者 注〕

- ・天秀尼の幼児名は諸説あり、奈阿は仮名です。また、逃亡の状況は創作です。
- ・天秀尼の侍女については、東慶寺の天秀尼の墓の傍に「天秀和尚御局」と刻銘された墓があり、お世話していた人と判るものの、その他は全く不明であり、本作品に登場する多麻は創作です。
- ・千姫の大坂城脱出状況については、諸説ありますが、葵の紋を正面に出して堂々と徳川陣営に行ったのではないかと考えました。
- ・『会津騒動』の細かい内容に触れるのを避けましたが、堀主水の妻子が東慶寺に駆け込んだのは史実に基づきます。

〔参考文献〕

- ・『豊臣家最後の姫』 三池純生 2013年 洋泉社・『天秀尼の生涯』 三池純生  
2017年 潮出版
- ・『東慶寺と駆込女』 井上禅定 1995年 有隣堂
- ・『季報 東慶寺』 2013年夏号 2013年 東慶寺
- ・『津軽双花』 葉室 麟 2016年 講談社
- ・『寛永主従記』（会津騒動） 田宮虎彦 2010年 明治書院